

文・安倍寧  
(音楽評論家)

# ペギー葉山



Peggy Hayama  
SINGER

## 原点は米軍クラブとバンド歌手だった。

ペギー葉山は、2012年、歌手生活60周年を祝って全国各地でコンサートを開いた。その後も元気溍刺、歌い続けているのは嬉しい限りだが、私は、そもそもこの数え方そのものにちょっぴり異論を抱いている。

なるほど彼女のレコード・デビューは、1952年、「ドミノ／火の接吻」(もちろんSP盤)だったから、そういう勘定も成り立ち得る。しかしそれ以前、すでにペギーは新進ジャズ、ポピュラー歌手として相当な売れっ子だったのだ。そのプロローグは無視できない。

彼女はよく「私の原点は米軍クラブとバンド歌手よ」という言葉を口にする。敗戦後、アメリカ軍に接収された新橋第一ホテル内の将校クラブで、一流ジャズ・オーケストラ、渡辺弘とスター・ダスターズの専属歌手として歌い始めたからだ。日本人向けのジャズ・コンサートでも当時のヒット曲「アゲイン」や「トゥ・ヤング」を歌い、人気が高かった。

バンド専属歌手はそのバンドの一員だから、マイクの前に立たないときでも、前列の端のほうにちょこんとすわって待機している。想像するに歌っていない間も多くのことを学んだのではないか。

それ以来の長い長いキャリアにもかかわらず、ペギーの声は衰えを知らない。しかも若

い頃より深みを増している。深みということ言うなら、むしろ声以上に歌唱力かもしれない。

去年春、名ピアニスト前田憲男の傘寿記念コンサートがあり、そのときペギーは「Can't Help Lovin' Dat Man(あの人が好き)」(ミュージカル『ショー・ボート』より)を歌ったが、これが絶品だった。これぞ究極のラヴ・ソング!私はその情感に圧倒された。

ジャズのスタンダード曲からシャンソン、カンツォーネまで、「南国土佐を後にして」から「ドレミの歌」まで、ペギー葉山の守備範囲は限りなく広い。そのなかで私がひとときわ愛着を持つのは、平岡精二作詞・作曲の「爪」[学生時代]である。ジャズ・ヴァイブラフォン奏者平岡と彼女の都会的センスがびたり一致したからこそ、こういうお洒落な持ち歌が生まれたのだろう。

ペギーと私は昭和一桁の同年生まれである。会えば苦しかった戦中・戦後体験の話になる。彼女はきっぱりと言う。

「あの時代を若い人たちに語り継いでいなくてはね」

それは、敗戦、廃墟、ジャズが分ち難く結びついている私たち世代の責務にちがいない。



PROFILE ペギー葉山(ペギー・はやま) 1933年、東京生まれ。高校時代、クラシックを学び、進駐軍放送から流れるポピュラー音楽に魅了され、ポピュラーソングに転向。高校在学中に渡辺弘とスター・ダスターズの専属歌手として、進駐軍のステージで活躍。卒業後、レコード・デビュー。テレビ番組「歌はともだち」の司会、「ひらけ!ポンキッキ」のレギュラーとして出演。『南国土佐を後にして』、『学生時代』、『ドレミの歌』などのヒット曲がある。現在も、テレビ・ラジオ、ステージに第一線で活躍中。

安倍寧(あべ・やすし) 1933年生まれ。音楽評論家、エイベックス・ライヴ・クリエイティブ・シニア・アドバイザー。元劇団四季取締役。55年、大学時代に新聞・雑誌への寄稿を始める。得意とする専門分野は、内外ポピュラー音楽、ミュージカルなど。著書に『音楽界実力派』、『ショウ・ビジネスに恋して』、『喝采がきこえてくる』など多数。1965年以降、毎年ブロードウェイの主要作品を見つけている。